横浜市立汐入小学校　「小さい学校　大きな心」　令和8年5月29日

大すき汐入

6月号

言葉をこえて、つながる学校

副校長　谷口　久美子

汐入小学校には、外国籍の児童や外国につながりのある児童が3割近く通っています。出身の国は、中国、フィリピン、ブラジル、ペルー、インドネシア、ベトナム、ネパールなど多岐にわたり、異なる文化を身近に感じながら、子どもたちは日々生活しています。こうした環境は、本校ならではのあたたかい魅力の一つです。

家庭で主に母国語を話す子どもや家族で日本に来たばかりの子どもは、学校で言葉や生活の違いに戸惑うことがあります。こうした子どもたちを支えるために国際教室では、教科の学習や日本語の指導をていねいに行い、少しずつ安心して過ごせるように支えています。また、掲示物やお便りの内容や表現を工夫し、誰にとっても伝わる環境づくりを心がけています。

先日、国際教室担当の教員が2年生の国語の単元「たんぽぽのちえ」の指導について話し合っていました。「ちえ」という言葉の意味をどう伝えるか話し合うなかで、これは日本人の子どもにとっても難しい言葉であり、言語に関係なく、どの子にもわかるように伝えることが、すべての子どもの理解を深めることにつながると話していたのが印象的でした。

こうした『どの子にも伝わるように工夫する姿勢』は、学習場面だけでなく学校生活全体に広がっています。私自身も、避難訓練の放送では、「短く、はっきり、簡潔に」を意識して伝えるようになりました。

子どもたちを見ていると、言葉が通じなくても、遊びを通して自然とつながっていきます。どの国の子にもわかる遊びを選んだり、困っている友だちにそっと寄り添ったりする姿が見られます。まだ日本語を学び始めたばかりの子どもが思わず「よっしゃー！」と叫ぶ場面もあり、日々の関わりの中で言葉や気持ちが少しずつ通じ合っていることを感じます。

また、保護者の方も、翻訳アプリなどを使いながら学校からのお知らせを読み、学習用具や書類を準備してくださいます。登校班で登校することや、給食当番の白衣を洗濯して交替で使うことなどについても理解してくださっています。こうしたご協力をとても心強く感じます。

言葉や習慣が違っても、互いを思いやる気持ちは同じです。一人ひとりが安心して過ごすことができる学校や地域であるために、これからも支え合い、理解し合う関係を大切にしていきたいと思います。子どもたちの姿に学びながら、あたたかなつながりを広げていきます。